

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道氣付
 (Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

第3回 大学図書館員京都研究集会 記録

大学図書館における利用者教育の理論と実践

1994年11月13日(日) 於 同志社大学神学館21番教室

目次

基調報告

大学図書館における利用者教育 — その意義と実状
 (同志社大学教授 大城善盛) p. 2

実践報告

発展途上大学からのレポート — 図書館ガイダンス事例報告
 (京都橘女子大学図書館 小川晋司) p. 12

京都産業大学における新入生およびゼミ学生対象のガイダンス
 (京都産業大学図書館 赤瀬美穂) p. 14

文献調査法の指導 — 大阪市立大学医学部での例
 (大阪市立大学図書館医学部分館 川西幹雄) p. 17

「人文学基礎」 — 京都精華大学における一つの試み
 (京都精華大学教授 田口瑛子) p. 19

主催者より p. 21

■□ 基調報告 ■□

大学図書館における利用者教育 —その意義と実状—

同志社大学教授 大城 善盛

1. はじめに

今日の研究集会の目的は、

- ① 4割に満たないわが国の大学図書館の利用者教育の現状を改善すること
- ② 講義の1コマを使ってやっているガイダンスの実態と問題点を明らかにすること
- ③ カリキュラムに組み込まれた利用者教育の先進事例に学び、それを広く実現する方法を探すこと

にあるということですので、その3点を念頭に置きながら、基調報告を試みたいと思う。

JLAの1987年調査(『現代の図書館』26巻2号掲載)によると、利用指導の実施状況は、国立大270館中65館(24.1%)、公立大50館中16館(32%)、私大447館中185館(41.4%)で、全体平均は34.7%である。しかし、それはオリエンテーションを除いたデータである。そこでオリエンテーションは利用指導の中に入らないのか、という疑問がでてくる。そのようなことから、まず利用指導とは何か、利用者教育とは何か、などから考えていきたいと思う。

確かに、アメリカでB.I.(BIBLIOGRAPHIC INSTRUCTION)という場合、一般にはオリエンテーションは含まれていない。そして、USER EDUCATION(利用者教育)をオリエンテーションとB.I.(もしくは、LIBRARY INSTRUCTION)に分けて考えるのが一般的である。しかし、アメリカとわが国のオリエンテーションの実施法を考えると、我々はオリエンテーションとはどうあるべきか、ということから考えていく必要がある。換言すれば、オリエンテーションも含めた利用者教育(それを、利用指導と呼んでもいいと私個人は思っているが、)を考えていく必要がある。

2. 利用者教育とは何か

大学図書館の利用者教育には、レファレンス・カウンターにおけるインフォーマルな個人的指導と、グループを対象とした計画的に実施されるフォーマルな指導がある。フォーマルな利用者教育について考えてみると、①オリエンテーション、②一般的情報探索指導③専門的情報探索指導、の3形態(レベル)を理論として考案することができる。それらの定義、目的、内容、推薦する実施方法は以下の通りである。

しかし、理論的側面に入る前に、参考までに我々が昨年調査した大規模大学図書館の利用者教育の状況を報告したい。表1-3とアンケート用紙を見て下さい。アンケートでオリエンテーションの実施形態として2種尋ねているが、それはわが国の現状を考慮してのことと、我々はあるべきオリエンテーションの姿は、大学のオリエンテーションとは独立

した形のものであるべきだ、と思っている。その理由は、以下に理論として挙げてあるオリエンテーションの内容にある。それらの内容を大学のオリエンテーションの一環としてやるオリエンテーションで説明することは不可能である、不可能でなくとも極めて不効率だと思うからである。

次に、オリエンテーション以外の利用指導については、A群とB群に分けて尋ねているが、それに関して回答してくれた図書館からいろいろ疑問が出されました。それに対しては、我々の方にちゃんと理由があつてのことでした。すなわち、以下の理論で言えば、A群が一般的情報探索指導、B群が専門的情報探索指導に当たる訳である。それを「一般的情報探索指導」、「専門的情報探索指導」と名称を付けて尋ねると、それらの名称が大学図書館界で未だ一般化していないので、かえって混乱を招くだろうと思ってA群、B群とした。

[利用者教育の理論（暫定案）]

1) オリエンテーション

定義および目的：図書館のレイアウト、コレクションの組織化、サービスについて基本的な知識を習得させることを目的として、大学図書館の新しい利用者（もしくは、潜在的利用者）に対して実施される利用者教育

内 容：1)図書館のレイアウトの紹介

- 2)コレクションとその組織化の紹介
- 3)利用規則の説明
- 4)目録の紹介
- 5)レファレンス・サービスの紹介
- 6)ILLサービスの紹介

実施法：1)日時：授業開始後より1ヶ月間

- 2)場所：図書館
- 3)手段：（口頭説明、ビデオ上映、または、C A I）+『図書館案内』や資料の配布 + 図書館ツアー

2) 一般的情報探索指導

定義および目的：情報や文献の基本的な探索能力を習得させることを目的として、オリエンテーションを受講した（もしくは、オリエンテーション・レベルの知識をもっている）利用者に対して実施される利用者教育

内 容：1)文献成立過程の説明

- 2)目録の使い方の指導
- 3)印刷媒体の一般的な参考図書の利用法の指導
- 4)印刷媒体の雑誌記事索引の利用法の指導
- 5)データベース等電子媒体の利用法の指導

実施法：1)一般的ワークショップ

- (a) 1～2回生のゼミ (course-integrated)

- (b) 自主的申込 (15~20人)
- 2) 主題別ワークショップ
 - (a) 1~2回生のゼミ (course-integrated)
 - (b) 自主的申込 (15~20人)
- 3) 科目の1部として (course-integrated)

3) 専門的情報探索指導

定義および目的：図書館内外の情報および情報源の効果的な利用技術およびレポートや小論文の作成技術を習得させることを目的として、一般的情報探索指導を受講した（もしくは、そのレベルの知識をもっている）利用者に実施される利用者教育

- 内容：
- 1) 専門的な情報や資料の収集法の指導
 - 2) 情報ファイル（カード）の作成法の指導
 - 3) レポートの構成法の指導
 - 4) 文章作法の指導
 - 5) 参考文献や注の書き方の指導

- 実施法：
- 1) クラスへの出向 (course-integrated)
 - 2) 個別指導（ターム・ペーパーや卒論の相談等）
 - 3) 独立科目（特定主題の文献探索技術の習得を目的とし、単位を与える独立科目）

以上のことを行なうことがフォーマルな利用者教育であると思う。もし必要であるのに前の段階を抜かした利用者教育をやった場合、それは欠陥のある利用者教育であると私は見なす。今後は、利用者教育をやっているかどうかを問題にするのではなく、どのような利用者教育をやっているのか、その内容的面を問題にすべきである。換言すれば、やっている利用者教育は、適当なものかどうか（妥当性のあるものかどうか）を問うべきであると思う。

3. 利用者教育の目的

1975年 C&RL NEWS に掲載されたACRL (Assoc. of College & Research Libraries) の "Toward Guidelines for Bibliographic Instruction in Academic Libraries"によると、利用者教育の目的は

- 1) 学生が図書館を記録情報の最初の拠点として認識すること
- 2) 学生がライブラリアン、特にレファレンス・ライブラリアンを情報源として認識し、気持ちよくライブラリアンに援助を求めるようになること
- 3) 学生が利用可能な情報源をよく知るようになること
 - a) 学生がキャンパスにある図書館の種類、場所、利用可能な情報源やコレクションを知ること
 - b) 学生がそれら図書館の利用の仕方を知ること

c)学生がキャンパスの外にある情報施設や情報源の利用の仕方を知るようになること

4)学生が利用可能な図書館資源を効果的に使えるようになること

a)学生が図書館で資料入手する際に請求記号などの所在情報を使えるようになること

b)学生がすべての主題に基本である参考図書の使い方を知るようになること

c)学生が自分の関心領域で情報がどのように組織化されているかを知り、その領域の基本的な参考図書の使い方を知るようになること

d)学生が図書館やキャンパス、もしくはその他の資源を使い、効率的な探索戦略を立て、実行できるようになること

e)学生が資料を評価でき、自分に必要な資料を選択できるようになること

である。

大学教育の主要な目的の一つは、学生に主体的な批判精神と情報リテラシーを涵養することであり、そのための最善の方策（の一つ）は、複数の理論や考え方が一杯詰まっている図書館資料を読ませることである。情報リテラシーを大学教育の目標の一つとすることは、最近の現象ではなく昔からあったと思われるが、情報化社会、生涯学習社会になって最近特に強調されるようになった、と理解すべきである。図書館と関わる情報リテラシーとは、上記のようなことであるが、広く情報リテラシーを定義すると、

1)処理すべき課題や問題を認識する能力

2)その課題や問題に関連する情報源についての知識

3)情報及び情報源を収集する能力

4)収集した情報を分析し評価する能力

5)分析し評価した情報を統合（再構成）する能力

6)口頭もしくは文字の形で、統合した情報を表現する能力

のことである。

大学図書館における利用者教育の目的は、その情報リテラシーの涵養にある。しかし、それはひとり図書館が負うものではなく、大学の大きな教育目標の一つであるべきで、大学の教育カリキュラムと一体となってはじめて、利用者教育もその機能（もしくは目的）を達成することができる。

大学図書館が真に学生の学習の場となるためには、大学教員が授業シラバスを作成し、授業の中に図書館を明確に位置づける必要がある。そして、それに呼応して、図書館が利用者教育を計画する。その際に、現代は大衆高等教育の時代で、学問の探求をめざして入学する者はわずかで、多くの学生が目的をはっきりもつことなく入学し、入学後は講義よりも課外活動に身を入れている学生が多いということを、図書館はしっかりと理解し把握しておく必要がある。

そして又、わが国では殆どの学生が大学に入ってくるまで、いわゆる「受験教育」しか受けてきていないこと、そのために、彼等の図書館に対する知識は極めて浅く、形だけの存在であることも認識しておく必要がある。そういうことから、アメリカと異なり、わが国ではオリエンテーションが非常に重要である（しかし、アメリカのオリエンテーションに関しては、あまり文献が出てこないというだけで、それがどれくらい重要であるのか、

今の私には把握できていない。何時か機会を作つて実際に調べてきたいと思っている)。

アメリカではイースタン・ミシガン大学に L O E X (Library Orientation EXchange) という利用者教育に関するクリアリングハウスがあり、そして又、大学図書館における利用者教育をテーマとした会議も毎年開催されている。さらに、RESEARCH STRATEGIES という利用者教育の専門誌も発行されている。COLLEGE & RESEARCH LIBRARIES にも大学図書館の利用者教育関係の論文が多く発表される。それら論文の中にはピアジェ (J. Piaget) ブルナー (J. S. Bruner) 、ペリー (W. G. Perry) 等の心理学者の「知能」「理解」「学習」、などの理論が取り上げられ、それらの理論を応用した形の利用者教育論が展開されている。

特に眼を引いたのは、Perryの大学生の知的発達論を応用したConstanceの利用者教育論である。Perryの理論を応用したConstanceによると、学生は二元論的視点 (dualism) から、複合的視点 (multiplicity) 、相対的視点 (relativism) を経て確信的視点 (commitment) へと知的発達を遂げるようである。二元論的視点とは、世の中を「正」と「誤」の二元で見ることで、多くの新入学生がそのような二元論的視点をもつて大学に入ってくるようである。彼等は問題に対して常に正しい答えを期待していて、彼等に対しては「Aのような解決法もある」、「Bのような解決法もある」というマルチアプローチはあまり効果的でないということである。

複合的視点とは、世の中には完全に知ることができない部分があり、「正」と「誤」だけでは片付けられないという認識を持つことである。大学を卒業する頃までにはそのような認識をもつようになるそうである。学生は、二元論的視点を克服すると、複雑な情報探索戦略にも積極的に挑戦するようになり、専門的な書誌類も進んで利用しようとするそうである。

相対的視点とは、世の中で完全に知ることのできる領域というのは殆どなく、意見を述べる時、それをバックアップする情報が必要であり、ある判断を下すにも知覚 (認識) 、分析、評価が必要であることを認識する視点である。そのような視点の典型的な表現は、「場合による」そうです。大学院でそのような視点が培われるが、しかし、学部学生では不可能ということではない。すべてのレベルに個人差があるからだそうです（確信的視点は省略する。参考文献 7）を参照）。

以上のようなアメリカの利用者教育の状況に対し、わが国ではせいぜい上記の 2) 一般的情報探索指導どまりで、JLA の 1987 年調査によると、そのレベルの利用者教育さえやっているところは少ないようである。

その原因としては 3 つのことが考えられる。一つは、利用者教育担当の司書を置かない図書館のサービス体制にあり、ひいては図書館にそれだけの余裕を与えない大学の認識の浅さにある。2 つめは、利用者教育の重要性を認識し、その具体的な内容や実施法まで理解している図書館員が少ないとだと思う。利用者教育は一種の教育である。教育は被教育者を知ることから始まり、教育の内容・方法にまで習熟していかなければならない。

さらに、理解とは何か、学習とは何か、学習を動機づけるものは何か、など最近の認知科学や学習心理学の成果にも目を通して、教育者としての資質を備える必要もある。学習方法については、静かな雰囲気の中で学習効果が上がるという人と賑やかな所を好む人、いく度も読んで理解する人とじっくり型の人、理屈抜きに覚えようとする人と理屈で納得

しないと身に入らないという人、など学習の個人スタイルがあることも理解する必要がある。残念ながら、わが国にはそこまで習熟している図書館員はそう多くないようと思われる。大学教員でもそこまで知つて教えていないのではないか?、と疑問をもつだらうが、私は教育者は本来そこまで知つておくべきだと思う。

さらにまた、現代は大衆高等教育の時代であるので、教員がクラスでパフォーマンスをしなければ学生がついてこない状況である。利用者教育をやる図書館員も教育方法(プレゼンテーション)には十分工夫する必要がある。私の個人的な体験で言うと、ぎこちなさを感じさせる図書館員が非常に多い。自分達は教育の専門家ではないから当り前ではないか、と言いたいと思うが、現在のところは、教員の占有権である授業を借りてやる訳ですから、そのような言い訳をしたら、教員は1コマさえ分け与えないと思う。ビデオ「図書館の人々」の中で八日市の図書館司書がストリーテリングのためのリハーサルをやっている場面があつたが、そのようなリハーサルが利用者教育においても必要であると思う。

文献を読むと、アメリカでも1コマの利用者教育が一般的のようで、B Iライブラリアンの間で、一発勝負だから全力を傾けるべきだという論調が見られる。教員でしたらダラダラやっていても、学生は単位を取るためにそのクラスに登録するだろうが、利用者教育でダラダラやつたら、すなわち、魅力に乏しいものだったら、学生は来ないだろうし、教員もそのような利用者教育に1コマを与えたりはしないだろう、という主旨の論調がよく見られる。

3つめの原因是、大学教員の図書館員の教育能力に対する不信感である。大学教育は教員の占有領域で、大学教員以外の人でも教育できると思っている教員はごく僅かである。特にわが国では、図書館員は事務職員と見られている。しかし、大学教育の大きな目的の一つが、学生に主体的な批判精神と情報リテラシーを涵養することであるならば、そのための最善の方策(の一つ)は、複数の考え方や理論が一杯詰まっている図書館資料を読ませることであり、図書館や図書館資料の使い方において、図書館員が教員を補助できるはずである。何故ならば、その分野に関しては、大学教員よりは図書館員の方がよく知つているからである。

しかし、わが国には依然として、教科書一つで講義をしている教員が多い。それは、その方が楽だからである。他方、アメリカの文献に書いてあつたことであるが、文献付きのシラバスを作つたり図書館資料を使うような授業をすると、教員も相当準備をしなければならず、へたすると自分の無知がさらけだされ恥をかくようなことにもなるので、それを恐れて教科書一本で講義をする教員もいるということである。

利用者教育を担当する図書館員は、大学教員のそのような微妙な心理状態も含めて、上記のようなことをしつかり理解し、肝に銘じておく必要があるよう思う。そして又、図書館員が大学教員の信頼を勝ち得るためには、現状のままではだめで、より一層の努力が必要であり、その上、司書職を専門職化する必要があるよう思われる。新しい大学設置基準では図書館に専門的職員を置くことになっているので、それを積極的に活用するということも大事であるよう思う。

まとめに入る前に、アメリカの大学図書館の実施状況をみてみたいと思う。その状況を表にしたのが表4である。簡単にまとめると、

- 1) B Iを必修としている大学が542(65%)あること、

- 2)科目の講義の1部として必修にしているところが401(48%)であること、
- 3)指導法としては、講義の1部を使ってやるところが788大学(94%)であること、
- 4)ポイント・オブ・ユースの指導を行っている大学が804(96%)であること、
- 5)独立科目は238大学(29%)が開講していること、
- 6)職員による図書館ツアーが714大学(86%)であること、
- 7)パブリシティの方法として、教員にB.I.ライブラリアンが個人的に働きかけていること、
- 8)指導の後は、短い評価(フィードバック)をしている大学が517(62%)であること、である。

4.まとめ

今日のテーマをもう一度振り返ってみると、一般的情報探索指導をやっている図書館が4割を越えるようにするにはどうしたらいいか、というのがテーマの一つであったので、最後に具体的な提案をしてみたいと思う。一般的情報探索指導レベルの利用者教育を広く普及させる手段として、その一つは、上記の図書館独自のオリエンテーションをしっかりとやることである。その種のオリエンテーションをしっかりとやれば、図書館の存在意義をキャンパスに大きくPRすることになり、さらにそれは、1コマも2コマを使った利用者教育をやってくれ、と教員から頼みにくる誘い水にもなると思う。

2つめは、OPACやニューメディアがある図書館ではそれらの使い方を中心に、どんどん図書館内でワークショップを開くことだと思う。3つめは、1~2回生担当の教員で利用者教育に関心をもっている、または、もっていそうな教員に積極的に働きかけることだと思う。そして、それらの教員が一緒にやっていくようになつたら、それら教員を中心にその輪を広げていくことであると思う。

独立科目を如何に設置するか、ということももう一つの今日のテーマであるが、アメリカの例を見ると独立科目は減ってきてているようであるので、今の私には独立科目の評価をすることができません。しかし、専門の特定主題の文献検索を中心とした独立科目は必要であり、それはむしろその分野の大学の教員が教えるべきものである、と現在の私は思っている。

一般的情報探索指導は、上記のように独立科目ではなく、授業の1部に組み込まれた形の指導法を上記で提案しているが、よく考えてみると、その一般的な情報探索指導の実施だけでも大変であることが分かる。JLAの調査で、一般的な情報探索指導はわが国では34.7%の図書館がやっていることになっているが、そのやっている図書館は何%の学生にやっているのか、その実態は分かつてない。もし、過半数の1~2回生にやろうとすれば多くの図書館で2~3人の専任の利用者教育の職員が必要になるように思われるが、その件については午後の京都産大の事例報告を楽しみにしたいと思う。

今やるべきことは、上記のような独自のオリエンテーションの実施に加えて、その一般的な情報探索指導をできるだけ多くの学生に広げることであろうと思う。そして、授業の一部を利用してやる場合、1コマで足りなければ(私は足らないと思っているが)2コマ、3コマに増やす努力をすることであろうと思う。その一般的な情報探索指導を十分やれば、

専門的情報探索指導は、教員がやるにせよ図書館員がやるにせよ、自然発生的にその種の要求が出てくるように思う。最後に、利用者に優しい、利用者の視点に立った利用者教育はどうあるべきか、というテーマが残っているが、それは上述のように、利用者教育に対して全体的展望をもち、「理解」「学習の動機」「学習法の個人差」などを理解し、以下のような利用者教育の計画を立てて実施すれば、それは結果として利用者の視点に立った利用者教育になると思う。

- 1) 目的を明確にする（利用者教育全体の目的と実際の個々の具体的指導の目的）
- 2) 受ける対象を把握する（規模とレベル）
- 3) 内容を明確にする（目的と合致した内容であること）
- 4) 方法を明確にする（指導形態及び手段）
- 5) 評価法を定める（何時、どのような形の評価をするか）

最後の最後に、情報技術との関わりについて一言述べておきたいと思う。マルチメディアやハイパーメディアなどの情報技術が出てきている今日である。これからは、当然それらの技術を取り込んだC A Iによる利用者教育も考えていくべきである。人的援助に勝るものはないと思うが、利用者教育を本格的にやると、図書館員が何人いても足らなくなると思う。マルチメディアがその人の問題を解決する手段として使えそうな気がする。具体的なイメージは持っていないが、図書館案内などにはすごく役に立ちそうな気がする。

(おおしろ・よしもり)

(参考文献)

- 1) 大城・生嶋・村上「大規模大学図書館における利用者教育の実態」
(『図書館学会年報』投稿中)
- 2) 拙稿「米国の大学図書館における利用者教育の動向」
(『図書館における利用者教育』日外アソシエーツ、1994、所収)
- 3) 拙稿「大学図書館における利用者教育（事例研究）」
(『文化学年報』42輯、1993)
- 4) 「利用者サービス」
(岩猿敏生他『大学図書館の管理と運営』J L A、1992、所収)
- 5) RESEARCH STRATEGIES (季刊) (Mountainside Pub., 1983-)
- 6) LIBRARY ORIENTATION SERIES (Pierian Press, 1972- 利用者教育の年次大会議録)
- 7) Oberman, C \$ Strauch, K. ed. Theories of Bibliographic Education. Bowker, 1982.

資料(アンケート)

大学図書館における利用者教育アンケート調査
(該当する項目を○で囲んで下さい)

1. 新入生への図書館案内はどのように行っていますか(複数○可)。

A) 大学のオリエンテーションの一環として行っている。

(その際の内容について。複数○可)

- a) 図書館の意義
- b) 利用カードの発行
- c) 開館日時
- d) 利用規則
- e) 図書館のレイアウト
- f) 目録の簡単な紹介
- g) レファレンス・サービスの紹介
- h) I L S の紹介
- i) コレクションの紹介
- j) その他(例えは:)

(方法について。複数○可)

- a) 小冊子『図書館利用案内』やプリント資料の配布
- b) スライドやビデオの上映
- c) その他(例えは:)

(規模について。複数○可)

- a) 全学一斉に
- b) 学部別に
- c) その他(例えは:)

B) 大学のオリエンテーションとは別の日に図書館独自で行っている。

(その際のPRの方法について。複数○可)

- a) 大学のオリエンテーション時
- b) 学内に掲示
- c) 図書館に掲示
- d) 教員を通して
- e) その他(例えは:)

(その際の内容について。複数○可)

- a) 図書館の意義
- b) 利用カードの発行
- c) 開館日時
- d) 利用規則
- e) 図書館のレイアウト
- f) 目録の簡単な紹介
- g) レファレンス・サービスの紹介
- h) I L S の紹介
- i) コレクションの紹介
- j) その他(例えは:)

(方法について。複数○可)

- a) 小冊子『図書館利用案内』やプリント資料の配布
- b) スライドやビデオの上映
- c) 図書館ツアーア
- d) その他(例えは:)

(上の方法について、b) またはc) に○をされた館は下記の問い合わせにお答え下さい)

(期間について)

- a) 1日
- b) 2~3日間
- c) 4~6日間
- d) 1週間以上

(一回あたりの図書館ツアーパートicipantの学生数について)

- a) 50人以上
- b) 20~50人
- c) 20人以下

2. オリエンテーション以外の利用指導を行っていますか。

A) いいえ

B) はい (ここに○をされた館は、下記の問い合わせにお答え下さい)

- A 群
- (内容について。複数○可)
 - a) カード目録の使い方
 - b) O P A C の使い方
 - c) 一般的参考図書の利用法
 - d) 主題別参考図書の利用法
 - e) C D - R O M の使い方
 - f) その他(例えは:)

- (方法について。複数○可)
 - a) 図書館主催で希望者を募って
 - b) 教員の要望によりゼミ単位で教室で実施
 - c) 教員の要望によりゼミ単位で図書館で実施
 - d) 独立科目を開講
 - e) その他(例えは:)

- B 群
- (内容について。複数○可)
 - a) 主題ごとの参考文献やその他の資料の紹介
 - b) レポートや卒論等のテーマに合わせた文献
 - c) 情報カードの使い方
 - d) レポートの構成法
 - e) 文章作法
 - f) 参考文献、注の書き方
 - g) その他(例えは:)

- (方法について。複数○可)
 - a) 図書館主催で希望者を募って
 - b) 教員の要望によりゼミ単位で教室で実施
 - c) 教員の要望によりゼミ単位で図書館で実施
 - d) 独立科目を開講
 - e) その他(例えは:)

コメント欄:

新入生への図書館案内

表1

		館 (%)
大学のオリエンテーションの一環として		53/71 (75)
内容(複数回答)		
図書館の意義 利用カードの発行 開館日時 利用規則 図書館のレイアウト 目録の簡単な紹介 レファレンス・サービスの紹介 I L Sの紹介 コレクションの紹介 その他(例えは:		37/53 (70) 33/53 (62) 46/53 (87) 44/53 (83) 40/53 (75) 41/53 (77) 40/53 (75) 20/53 (38) 15/53 (28) 5/53 (9)
方法(複数回答)		
小冊子『図書館利用案内』や プリント資料の配布 スライドやビデオの上映 その他		45/53 (85) 14/53 (26) 7/53 (13)

表2

		館 (%)
大学のオリエンテーション時ではなく、 別の日に図書館独自で		40/71 (56)
PRの方法(複数回答)		
大学のオリエンテーション時 学内に掲示 図書館に掲示 教員を通して その他		17/40 (43) 18/40 (45) 29/40 (73) 12/40 (30) 9/40 (23)
内容(複数回答)		
図書館の意義 利用カードの発行 開館日時 利用規則 図書館のレイアウト 目録の簡単な紹介 レファレンス・サービスの紹介 I L Sの紹介 コレクションの紹介 その他		26/40 (65) 25/40 (63) 33/40 (83) 35/40 (88) 36/40 (90) 37/40 (93) 33/40 (83) 20/40 (50) 12/40 (30) 5/40 (13)
方法(複数回答)		
小冊子『図書館利用案内』や プリント資料の配布 スライドやビデオの上映 図書館ツアー その他(例えは:		30/40 (75) 18/40 (45) 28/40 (70) 5/40 (13)
スライドやビデオの上映、 もしくは図書館ツアーの期間		
1日 2~3日間 4~6日間 1週間以上		2/40 (5) 12/40 (30) 12/40 (30) 10/40 (25)
図書館ツアーの一回当りの学生数		
50人以上 20~50人 20人以下		6/28 (21) 8/28 (29) 14/28 (50)

オリエンテーション以外の利用指導

表3

		館%	館 (%)
行っている		51/71 (72%)	
内容(複数回答)			
A 群	カード目録の使い方 O P A C の使い方 一般的参考図書の利用法 主題別参考図書の利用法 C D - R O M の使い方 その他	32/51 (63) 41/51 (80) 36/51 (71) 31/51 (61) 26/51 (51) 6/51 (12)	(45) (58) (51) (44) (37) (8)
方法(複数回答)			
B 群	図書館主催 教員の要望(ゼミ単位で図書室) 教員の要望(ゼミ単位で図書館) 独立科目を開講 その他	30/51 (59) 7/51 (14) 36/51 (71) 1/51 (2) 2/51 (4)	(42) (10) (51) (1) (3)
内容(複数回答)			
B 群	主題ごとの参考文献等紹介 レポートや卒論等のテーマ に合わせた文献探索法 情報カードの使い方 レポートの構成法 文章作法 参考文献、注の書き方 その他	28/51 (55) 28/51 (55) 1/51 (2) 0 (0) 0 (0) 2/51 (4) 0 (0)	(39) (39) (1) (0) (0) (3) (0)
方法(複数回答)			
B 群	図書館主催 教員の要望(ゼミ単位で図書室) 教員の要望(ゼミ単位で図書館) 独立科目を開講 その他	8/51 (16) 5/51 (10) 30/51 (59) 0 (0) 3/51 (6)	(11) (7) (42) (0) (4)

米国の大学図書館におけるB I

表4

		1973年 (139館)	1979年 (830館)	1987年 (834館)
		館数(%)	館数(%)	館数(%)
担当部署	レファレンス部門 独立部門 無回答	X X X	287 (35) 37 (4) 7 (61)	488 (58) 87 (10) ?
必修度	必修 科目的講義の一部として 科目の宿題の一部として ワークショップ 独立科目	X X X X X	200 (24) X X X X	542 (65) 401 (48) 251 (31) 68 (8) 64 (8)
指導法	独立科目 セミナー／ワークショップ タームベーパー／クリニック 職業 CAI ポイント・オブ・ユース 職員による図書館ツアーアー テーブル／スライドによるツアー 印刷資料によるツアー 個人対象の指導	30 (22) X X 102 (73) 6 (4) X 105 (76) 40 (28) 26 (19) 86 (62)	347 (42) 274 (32) 173 (21) 790 (95) 18 (2) 575 (69) 670 (81) 226 (27) 263 (32) 558 (67)	238 (29) X 144 (17) 788 (94) 122 (15) 804 (98) 714 (86) 308 (36) 270 (32) 792 (95)
使用した印刷物	主題書籍 主題バフアインダー 情報断面ガイド 練習問題(又は宿題) ワークブック ハンドブック(学生用) ハンドブック(教育用)	90 (65) 51 (37) X 49 (35) 19 (14) 84 (60) 32 (23)	468 (56) 335 (40) 405 (49) 318 (38) 209 (25) 456 (55) 179 (22)	623 (75) 421 (51) 607 (73) 508 (61) 221 (26) 313 (38) 175 (21)
使用した非図書資料	トランスペアレンシー スライド／テーブル オーディオ・テープ ビデオ	21 (15) 47 (34) 33 (24) 15 (11)	330 (40) 306 (37) 204 (25) 105 (13)	355 (43) 313 (38) 98 (12) 191 (23)
パブリシティ	サイン／ポスター 教員と個人的なコンタクト 教員に案内状を送付 学生新聞に掲載 教説会で案内 学生との個人的なコンタクト	13 (9) 112 (80) 12 (9) 57 (41) X	216 (26) 657 (79) 289 (35) 257 (31) 79 (10)	265 (32) 764 (92) 506 (61) 221 (26) 288 (35)
評価	なし フィードバック 学生へのフィードバック テスト	42 (30) ? 31 (22) 24 (17)	414 (52) ? 164 (20) 59 (7)	517 (62) 300 (36) 195 (23)

■口実践報告1 ■□

発展途上大学からのレポート —図書館ガイダンス事例報告—

京都橘女子大学図書館 小川 智司

1. ごあいさつがわりのおはなし

最近「Give & Receive」（与えることの出来るものは惜しみなく与え、与えられたものを受け取る）という言葉を耳にしました。本学は、正に、他大学の図書館のみなさんのおかげで成り立っているといつてもよいくらいなので、この言葉との出会いは、私に大変勇気を与えてくれるものでした。

2. 本学の環境とレファレンスの歴史

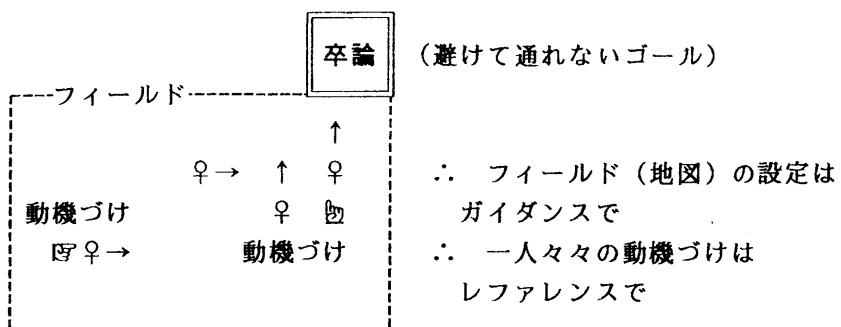
- ◎環境 ① 蔵書が多くない
② 人手がない ∴ 金なし、物なし、人のフンドシはある(?)
③ 京都にある というのが、本学の特徴でしょうか。

◎歴史 例えていえば・・・

- 中世以前 図書館職人によるギルド制社会といえると思います。
近代前期 レファレンス拡大期=「なんでもしまっせ橋の図書館」政策
∴ これにより複写依頼が増大しました。
近代後期 レファレンス絞り込み期
∴ 「全部やってたらいくら手があっても足りない」。そこで「労力は受益者負担」政策。これにより閲覧依頼が増大しました。
現代 ガイダンスとの有機的結合をめざし、以下の施策を実施しました。
悉皆(いっかい)型ガイダンスの追求(全部のゼミ)
ガイダンスの定型化・合理化(レジメの定型化)
教員集団の刺激(ガイダンス、レファレンスの関連分析)
学生応対の定型化、レファレンスの絞り込み
未 来 実は今、私達はここにいるのですが、あまり明るいとは言えないようです。

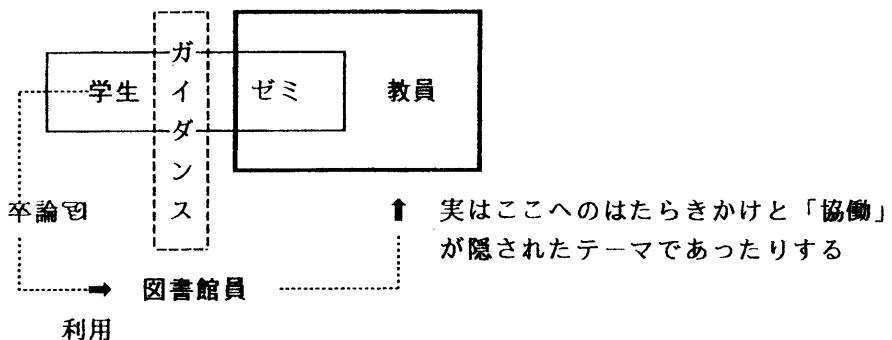
3. 卒論をゴールにした囲い込み

ガイダンスとレファレンスの有機的結合を、4回生の卒論制作に関して図解すると次頁の図のようになります。



4. 利用促進のトライアングル（協働）

これらの、歴史の中から私たちが得た思わぬ？成果は、学生、教員、図書館員の「協働」の促進であったのではないか。図書館としては、特に、教員に対する、有効な働き懸けの材料としてガイダンスを考えることが出来るのではないか、ということでした。



∴ 利用促進は、サービスの促進であり、サービスを「協働作業」と考えればサービスの促進は、「協働の促進」ということになるのではないでしょうか。

また、「協働の促進」は、その、それぞれの対象の距離を近づけ、よい刺激を与えあうことでもあります。具体的には、

① 学生への刺激

「ガイダンスでやったやろ？」

「自分の要るもんは自分で調べて自分の足で（間違いは自分の責任）」

∴ 自分の力で資料が探せるように仕向けるのが「教育的**」ではないだろうか

② 教員への刺激

「お、こんな探し方があったんや」

「お、これはラクや。ここは図書館の人にお任せてしまおう」

「お、うちのゼミ生は図書館を使っていない。まずいな」
∴ 図書館のことを意識してもらう

③ 図書館としては

結果として応対や所蔵調査で手が抜ける（しょうもない質問が減る。しょうもない質問にフタをするのではない）

蔵書（特に参考図書）のチェック、学生や教員のニーズがわかる
場合によってはゼミや授業内容、教員の実態を知ることができる
結果として教学にコミットし「内実化」に貢献するチャンスとなる

5. 問題提起

以上の報告から、皆さんと一緒に考えていただきたいことが思い浮かびます。それは、「よいサービスとは何か？」ということです。学生にとって、教員にとって、図書館員にとって、そして、自動販売機社会に生きる私たちみんなにとって・・・。このことが、実は、今回私が報告で申し述べたかった影の、そして、ほんとのテーマなのであります。
(おがわ・しんじ)

■□実践報告 2 ■□

京都産業大学図書館における 新入生およびゼミ学生対象のガイダンス

京都産業大学図書館 赤瀬 美穂

1. はじめに

本学図書館では、学生・教員・職員など大学の全構成員を対象に、ライブラリー・ガイダンスを行っている。なかでも4月から6月にかけて連日実施している新入生とゼミ学生対象のガイダンスについて概要を報告したい。

大学図書館における利用者へのガイダンスが必要という点では、多くの図書館員に異論はないことと思う。近年、大学図書館の情報サービスが多様化していることが大きな理由である。本学の場合は、7年前に中央図書館がオープンして積極的に新しいサービスを行える環境が整ってきたことが大きい。O P A C の稼働や外部データベースの利用、C D - R O Mなどの導入、相互利用サービスを積極的に行うようになったことなどである。

一方で、学生が図書館の利用について基本的なことをわかっていないというか、これまで知らされてこなかったという現実がある。本学の場合、このような現状で、学生が大学の授業やゼミの課題、卒業論文などに対応するのは困難であり、まずできるところから始

めようということで対象者別にガイダンスを行ってきた。

2. ライブラリー・ガイダンスの実際

ライブラリー・ガイダンスは、責任係である参考係が作成した年間計画表に沿って実施される。ゼミの場合は例年70クラス前後の参加が多く、協力を得られる教員の数もほぼ確定している。対して、新入生の場合は年々増加の一途をたどっており、まだまだ開拓の余地がある。昨年3,000余名の新入者全体の40%（46クラス）を占めた参加者数は今年は70%（79クラス）に達した。大学入学後、なるべく早い時期に出来るだけ多くの学生にガイダンスを実施できることが大切であると思う。

3. 事例(1) 新入生対象のライブラリー・ガイダンス

ここでは図書館主催で希望者に実施されるガイダンスについて紹介する。例年4月から6月にかけて個人、グループ、クラス単位で受け付けている。図書館利用の入門編ともいいうべき内容である。

内 容： ①開館時間、貸出冊数、レファレンス・サービス、相互利用サービス、視聴覚サービスなど主なサービスの説明と利用案内（10分）
 ②オンライン目録利用法のビデオ上映（10分） ③館内ツアー（40分）
 ④オンライン目録の検索実習（25分） ⑤アンケート用紙記入（5分）

時 間： 90分（1コマ）

配布資料： 利用案内（1枚もの）、館内案合図、アンケート用紙

担 当 者： 閲覧係および参考係（7名で）担当。1回の担当者は1～3名

当初は希望者に実施していたが、1990年以降は、教養課程の英語が必修であるところに着目し、英語担当教員全員にガイダンス案内状を送り、クラス単位の参加を募っている。

4. 事例(2) ゼミ学生対象のライブラリー・ガイダンス

ゼミ学生対象のガイダンスは、専門分野の文献探索法の習得を目標にしている。新入生ガイダンスと並行して4月から6月に、ゼミのクラス単位で受け付けている。

内 容： ①簡単な利用案内（分類のしくみ、レファレンス・サービス、相互利用サービス、CD-ROM、オンライン情報検索の紹介など）（10分）
 ②ゼミ関連の文献の探し方についての説明（40分）
 ③オンライン目録の検索実習（15分）
 ④CD-ROMの検索実習（15分）
 ⑤関連参考図書類の配架場所の案内（5分）
 ⑥アンケート用紙記入（5分）

時 間： 90分（1コマ）

配布資料： 『文献・情報の探し方』、ゼミのテーマに沿って作成した関連資料等

担当者： 参考係・閲覧係と参考業務経験者（7名）で担当。1回の担当者は1~2名

5. 問題点

新入生のガイダンス参加が義務付けられていないため、全員に実施できないこと、この結果ゼミ・ガイダンスでは文献探索法を説明する前に、入門編の説明に多くの時間を費さなければならない。また、学生のレベルに応じて段階的に継続して実施することが難しいことも大きな問題である。内容についても、ゼミ・ガイダンスでは特定の教員の協力に頼りがちであり、単発的あるいは詰め込みすぎた内容になってしまい、学生にも教員にもそして図書館員にも不満が残ることになりがちである。

図書館側の問題としては、担当職員の態勢をどうするかということがある。例年、4月初旬から3ヵ月間、連日1日4コマのガイダンスを日常業務と並行して実施するのはかなりの負担である。

6. 評価と効果

評価については、1992年に実施した「図書館利用実態調査」やガイダンス後に行ったアンケート結果などから教員や学生の考えをうかがうことができる。「実態調査」については、専任教員の半数の回収率だったが、その内の75%は「図書館と協力して積極的に行うべき、必修にすべき」と答えている。また、ガイダンスを授業で受けさせたことのある教員の9割以上が、内容に満足している。

一方、学生の反応では「役に立つ」と9割が回答、過去にガイダンスを受けた学生に具体的にどのような変化があったのかを尋ねると、オンライン目録が使える、図書館に来る回数が増えた、特に変化なしなどと答えている。カウンターでの感触としては、OPACやCD-ROM、雑誌記事索引類やデータベースの利用増、その結果、雑誌のバックナンバーや相互利用サービスの利用増などが目につく。

7. おわりに

今後の課題としては、新入生ガイダンスの必修化が当面の目標である。ガイダンスを担当していく思うのは、図書館員はもっと利用者教育に関心を持つこと、そして学生の参加を促し教員の協力を得るには、日々の図書館サービスの充実に努めることがまず肝要であることなどである。

（あかせ・みほ）

■□実践報告3 ■□

文献調査法の指導 — 大阪市立大学医学部での例 —

大阪市立大学附属図書館医学部分館 川西 幹雄

1. 大阪市立大学医学部と医学部分館について

まず最初に大阪市立大学の構成を紹介しておく必要があります。本学は8学部1研究所からなりますが、そのうち医学部だけが大阪市阿倍野区に別キャンパスを持っており、図書館もこれに対応して本部のある杉本キャンパスに中央館、阿倍野キャンパスに医学部分館を配置しています。このため、阿倍野キャンパスは医科大学とその病院・図書館があるという単科大学のような容貌を呈しており、当館の業務内容とその性格がこのことに大きく左右されることとは言うまでもありません。

2. 当館の利用者指導

当館で行う利用者指導は2種類に大別されます（個別の指導は除く）。一つは学部主催のオリエンテーションの一環としてのもので、学部新入生・3回生・大学院新入生・臨床研修医発令者に対して行っています。しかしこれらは時間が5~10分のものであり、いわゆる館内ツアーも伴わないので、オリエンテーションとして全く不充分なものでしかありません。

もう一つは文献調査（検索）法の指導を行っているもので、対象は学部4回生及び「新入医局員」（研修医発令者、大学院新入生が主）です。大城先生の分類によればオリエンテーションから専門的情報探索指導へ飛躍していることになりますが、この飛躍が可能になるのは最初に述べたとおり当館が単科大学の、それも医学系の図書館であることによっています。

すなわち、①利用者が医師あるいはそれを目指しているものにほぼ限られ、②対象となる学問分野が医学にほぼ限定される、③医学分野は二次資料の整備の歴史が古く優れたものが多く、④文献のほとんどが雑誌論文の形をとる、等の条件の中に当館が置かれているためなのですが、このことにぜひ注意して頂きたいのです。私たちの行っていることはいわゆる「医学図書館」だからこそできる、あるいはこうならざるをえないのだということをもう一度強調したいと思います。

3. 学部4回生に対する「文献調査法」の指導

今回の研究集会で主に問題としたのは、カリキュラムの一環として組み込まれている学部4回生に対する指導でした。

本学医学部には「修業実習」という独特の制度があります。要するにこれから臨床医学

の教育課程に入ろうとする学生に対していわゆる基礎医学の研究を2カ月間程度実体験させようという制度で、1973年以来の歴史を持っています。それ以前の1972年から当館では教員の依頼を受けて講義時間に二次資料の使い方を講義していましたが、1980年度から修業実習の冒頭の時間に講義を行うことでカリキュラムの一環となりました。

現在の概要は次のとおりです。時間は約4時間。テキストとして『医学文献の解説と文献探索方法』を作成し使用します。講義は2段階に分かれ、まず概論として文献調査法の必要性や二次資料の紹介、最近の検索手段の多様化と発展を解説し、次に代表的な二次資料である"Index Medicus"の概要とその索引構造を説明します。

さらに"Index Medicus"を実際に使用して問題を解かせ（5人あたり3題程度）、解題を行います。問題はUp-to-dateを心がけ、教員の協力を得て毎年数問ずつ新しい問題を出題します。また、解題にあたっては正解を出すことよりも検索過程が適切かどうかに重点を置いています。利用指導の効果という面に限れば、何かをさせる、ということに大きな意味があるのではないかと毎年感じています。

4. 課題と展望

20年近くこの形態が続いてきた中でいくつかの課題が現れてきました。もっとも大きいのは検索手段の変化によるもの。特に最近のCD-ROMによる検索の普及は著しく、講義を行った翌日には学生が"Index Medicus"をCD-ROMで検索するというパターンがここ数年定着しつつあります。CD-ROM検索では冊子体検索の時代には不可能であった論理演算による検索がいともたやすくでき、シソーラスの存在感も薄い、ネットワーク化されておれば図書館に来ることなく検索ができる、そのような環境に利用者が慣れつつある今、次の段階としてどのような指導形態を考えれば良いのでしょうか。

「新入医局員」に対するガイダンスでは、今年からの試みですが、CD-ROM検索の説明と実習をメインに据えてみました。端末数の限界はありますが、CD-ROM説明会としたわけです。数千万円かけてネットワーク検索を導入して文献調査法の実習をこの形に変えてしまう、というのはすぐ思いつくことですが、それだけでは片手落ちのような気がします。

私の経験したCD-ROM検索の中で"Index Medicus"の"MEDLINE"はもっとも簡単に有効な検索ができるデータベースといえます。それは基になっている"Index Medicus"がよく整備されたシソーラス等によって系統的に構築され続けていることによるもので、その説明を抜きにして無闇にキーボードを叩かせるという指導は、一見時代の先端を行っているようで実は先端や本質をつかみ損ねやすい方向へ導く指導になってしまふのではないかでしょうか。私自身は演習の最後にそういう意味のことを話すようにしています。

去る11月21～23日に開催された『第14回医療情報学連合大会』の論文集を読む機会がありました。CD-ROM検索のネットワーク化が本学でも計画に上っていることともあわせて、私たちの文献調査法の指導も曲がり角にきています。それは私たちに新たな何かを要求することになるでしょう。

終わりに、発表の機会を与えて下さった方々、発表をお聴き下さった方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(かわにし・みきお)

■□実践報告4 ■□

「人文学基礎」 — 京都精華大学における一つの試み —

京都精華大学人文学部教授 田口 瑛子

1. はじめに

1989年の人文学部開設以来、人文学とはなにか？という問題を抱えている。なんでもやれそうだということでは、なにをやりたいか分からない学生たちにとっては、他学部の友人に「人文学」を説明しづらい、自分でも分からない……という問題である。分かりやすいことが、かならずしも良いことであるとは思わないが、若者たちにはこの不安は耐えがたいものようである。そこで考え出された説明の一つが「行動する人文学」であり、カリキュラム上は「フィールドワーク（地域研究）」である。

2. 人文学基礎 — 大学で学ぶための基礎トレーニング

1989年度生が卒業し、新設学部の1サイクルを終えた時点で、カリキュラムの見直しがおこなわれた。そこで誕生した新科目の一つが「人文学基礎」である。1993年度より開始された。1年生の必修科目（週1回前前期2単位）、1クラス約25名で、大学での学び方を学ぶことを目的としている。4年生の卒業論文を書く時期になって、こんなことも訓練できていなかつたのか、と教員の方であわてないためでもある。

初年度は教員も試行錯誤であった。「履修のてびき1993」で見る限りでも、かなり野心的な項目、授業計画、テキストをあげている教員もいる一方、何をすべきか「とまどい」を表明しているものもいる。この経験に基づき、94年度には多少整理され、以下の「獲得目標」を共通課題として、より綿密な授業計画が立てられた。

- 獲得目標：
- ① 本を読む力と習慣をつける
 - ② 資料探索の方法を学ぶ
 - ③ 論理的思考・分析力を培う
 - ④ 文章表現力を培う
 - ⑤ 論文・レポート作成の方法を学ぶ

これはかなり盛りだくさんではある。「履修のてびき1994」の分析から浮き彫りにされてきたのは、「読む・書く」の重視と「興味・関心」への配慮である。これは93年度「人文学基礎」および他のクラスでの学生たちとの接触から出てきているのではなかろうか。私の場合でも今年度は②の資料探索法の比重がかなり減り、「読むことにより関心を喚起し、なんとか書こう」という授業になつていった。関心とも関係するのであろうが、いざレポートを書くと、文章を読み込む力の弱さを露呈する学生がいる。多くの教員は「調べる」以前のところで、悪戦苦闘している。

3. 図書館（員）と利用者教育

「人文学基礎」担当者の多くは人文・社会科学系の教員で、旧一般教育科目担当者である。文献検索や図書館の利用に関しては、「自然に」あるいは「徒弟制的に」学んだ人たちが多数であろう。自分のためにはおこなえるが、目的意識の明確でない学生集団に対する教育方法ということになると、プロといえる人ばかりではない。そこで、とつぜんビデオ「図書館の達人」が登場したり、図書館に学生をつれて行き、図書館員に図書館案内を兼ねた文献検索入門を依頼することになる。多くの場合は4月～5月ごろに、通常のクラスとは切り離された形でおこなわれているようである。

私の場合は図書館員の忙しい学期初めは避ける。「フィールドワークも図書館から始まる」をキャッチフレーズに、授業の中で学生の関心を引きつけるべく設定したテーマに関係づける形で、図書館紹介と調べ方の演習をおこなうよう心がけている。しかし動機づけに手間取り、この部分に割ける時間が減らざるをえなのが実情である。食欲がないものの目の前に高カロリーの料理を並べることを想像してほしい。

「狭い・専任職員が少ない（経験豊富な職員も少ない）・資料が少ない」というのが京都精華大学図書館の実態であるが、そのような図書館であっても、学部の教員担当科目とは別に、利用者教育は図書館員の自主的プログラムで実行するのが望ましいと考える。図書館員は図書館のプロフェッショナルであり、学部学生の利用者教育をアマチュアの教員まかせにすべきではない。教員との連携は重要だが、図書館員が指導することを中心に考えるべきだ。そして、このことは大学教育での図書館員のアイデンティー確立のためにも重要なステップになるであろう。

出来ることから始め、徐々にその範囲を広げてゆけばよい。そのためにもまず最低限「講義要綱」類には目を通してほしい。これは利用者としての教員のタテマエとナヤミの一部を知る便利な方法である。私の考えは、教員は担当クラスで主として動機づけにかかり、図書館員は主として全学的な利用者教育実践に責任をもつという分担である。これは別個におこなわれる事もあるが、できるだけ連携させることがより効果的であろう。利用者教育を媒介として、教員や学生と接する機会が増えることは、利用者をよりよく知ることにもつながる。

4. おわりに — 図書館員への期待

過去2年の卒業論文記録集に目を通すと、人文学部の教育成果の特徴が浮かび上がってくる。多くの卒論の出発点は学生自身の体験や実感に基づいており、フィールドワークの手法によるものが多い。人文・社会科学系とはいえ、図書館でほぼ文献資料だけに依存した論文は少ない。分野も多岐に渡るが、現代社会を反映した事象への関心が目立つ。成功の度合いは別にしても、独自な視点を見つけようとする姿勢は評価に値する。ゼミでは一見軽そうなテーマをしっかりとやるので学生は大変だ、と宣言している若手教員もいる。

このような学生や教員の関心領域については、今までの本学図書館資料では決して十分とはいえない。一通りの利用教育を受けて、フィールドワークへの関心を図書館にぶつけてみたが、めぼしい成果はあがらない……という恐れも大きい。図書館員は蔵書構築に

も責任がある。利用者を知ることが、図書館員による積極的な選書活動にもつながっていくことを期待している。

大学では「受験勉強」からは解放される必要があるが、どんな大学もレジャーランドでは困る。強いて勉める「勉強」ではなく、学ぶことが面白く楽しいことを発見できる場でありたい。これが「人文学基礎」の大きな目的であると解釈している。図書館は大学生としての自立のためのエンパワーに助力できる可能性がある。そして、これは図書館員自身のエンパワーメントに、大いに役立つはずである。
(たぐち・えいこ)

◆◇ 主催者より ◆◇

今回の研究集会実現への道のりは、まず京都支部の全会員にアンケートを実施するとからスタートしました。広く収集したニーズや意見をもとに支部委員会で議論し、研究集会での主眼は以下の点に絞りました。第1に、現在34.7%と言われている大学図書館における利用者教育の実施率を向上させるためにはどうすればよいのか。第2に現在行われているガイダンス（とりわけオリエンテーションの中で行われている）の問題点や課題を明らかにし、利用者の視点に立った学習理論に基づく利用者教育のあり方を模索する。第3に、教員や医学図書館員が行っているカリキュラムに組み込まれた利用者教育の先進例に学び、それらを実現する方途を探る、の3点です。

それを見て基調報告には同志社大学教授の大城善盛先生を戴くことが決まりました。そして実践報告には、京都橘女子大学、京都産業大学の多様な利用者教育の事例、講義に組み込まれた大阪市立大学付属図書館医学部分館の事例、教員の立場から京都精華大学の田口瑛子先生の報告、というプログラムが実現しました。

研究集会での議論を通して、「利用者教育というものは図書館員が主題知識を含めた力量を發揮すべく大変重要な仕事である。自信を持って、まず出来ることから積み重ねていくことが大切である」という共通認識を形成することが出来ました。また大城先生が提案されたような、「利用者教育のシラバス確立に向かって、図書館員が研鑽し、努力して行く必要がある」という将来的課題も確認されました。

密度の濃い内容から、参加者の「たいへんよかったです」「元気が出た」という感想も多数寄せられ、関西のみならず、中部、関東、中国地区から総計で80名の参加者を集めて十分価値のある研究集会となりました。また終了後の懇親会も大変盛況でした。

日曜日であるにも関わらず、多数の積極的な参加が得られた理由はいくつか考えられます。まずテーマと内容が良かったこと。次に、準備と並行して広報活動を逐一展開してきたこと。しかし何より、図書館員の「利用者のために少しでもよいサービスを」という心意気が研究集会を成功に導いたと確信しています。報告者の方々と参加者の皆様に改めて感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

京都支部では今後も是非、このような実のある研究集会を継続していきたいと考えています。ご期待下さい。

公告

大学図書館問題研究会
近畿5支部新春合同例会

講演

ソ連型社会主义の崩壊と
新しい社会への展望 (仮題)

新しい社会を生み出す要因は成熟しつつあるのか?
この問題に対する答は、人間の存続にかかわることです

講師

置塩信雄 先生 (大阪経済大学教授)
(神戸大学名誉教授)

プロフィール 1927年兵庫県生まれ
1950年神戸大学経済学部卒、理論経済学専攻

著書 「現代資本主義と経済学」岩波書店、1986
「マルクス経済学2」筑摩書房、1987
「現代経済学2」筑摩書房、1988
「経済学」大月書店、1988(共著)
「経済学はいま何を考えているか」大月書店、1993

1995年1月28日(土) 14:00~16:00

神戸市勤労会館 2階多目的ホール

神戸市中央区雲井通5-1-2 ☎078-232-1881

三宮駅 (JR、阪急、阪神、市営地下鉄、ポートライナー)
下車、中央幹線を東へ徒歩5分。中央区役所隣。

参加申込受付、懇親会等については別途ご案内いたします。